慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

第122回生涯教育研修セミナー

「呼吸器疾患最近の話題：肺がん、喘息そして感染症COVID-19まで」

内科学教室（呼吸器）　福永　興壱（73回）

令和2年10月27日第122回生涯教育研修セミナーが開催されました。昨年は台風そして今年になってからのCOVID-19流行の影響で3回のセミナーが中止となり、実に1年ぶりの本会開催となりました。また今回は感染対策のためオンラインでのセミナー形式となり、主催者側も初めての試みであったため準備段階から念入りのリハーサルを繰り返し、当日を迎えました。

今回は「呼吸器疾患最近の話題：肺がん、喘息そして感染症COVID-19まで」というテーマで3人の演者に講演を頂きました。

1演題目は本学臨床研究推進センター特任助教寺井秀樹先生（83回）から肺癌薬物治療の進歩と題して、Ⅳ期非小細胞肺癌の薬物治療を中心にお話いただきました。最初に1980年代から殺細胞性抗癌剤、2000年代に分子標的薬（EGFRやALKなどドライバー遺伝子変異に対するチロシンキナーゼ阻害剤、腫瘍血管に対する血管新生阻害剤）、2010年代に入り免疫チェックポイント阻害剤（抗PD1／PD-L1阻害剤）と加速度的な進化を遂げている肺癌治療の歴史について触れられました。さらに肺癌組織でのドライバー遺伝子異常やPD-L1発現の解析結果をふまえた個々の患者の状態に合わせてオーダーメイド治療が可能となったことを具体例とともにわかりやすく示されました。また、薬物治療の進歩に伴いかつては積極的治療法がなかったⅣ期肺がんも二次、三次治療まで含めた長い期間での治療計画を立てていける時代となり、改めて肺がん治療の進歩を感じさせる講演でありました。

2演題目は帝京大学医学部内科学講座呼吸器・アレルギー学教授長瀬洋之先生から気管支喘息のテーマでお話を頂きました。気管支喘息は吸入ステロイド（ICS）の普及により喘息死の減少、日常のコントロールも良好になりましたが、いまだ治療不応性の重症喘息患者が約5％存在します。一方で、この10年間のうちに4つの分子標的薬（抗体製剤）が導入され、重症喘息患者にも光明が差してきました。そしてこれにより喘息治療はタイプ別に見た層別化医療に向けて進んでいることをご講演頂きました。また最近のCOVID-19の蔓延化により多くの喘息患者が不安を抱えられていると思いますが、これまでの臨床研究では喘息患者のCOVID-19罹患率は平均より低く、罹患しても重症化しないことが明らかになってきていることを示されました。しかしこれにはコロナ禍においてICSを含めた標準治療を継続することが重要なポイントであることを強調されました。

3演題目は、本学呼吸器内科石井誠准教授（75回）が、「COVID-19共存時代の呼吸器感染症Up to Date」のタイトルで、前半はCOVID-19に関して講演を行われました。始めにCOVID-19について最新のデータも踏まえながら概説されました。また本学呼吸器内科及び関連病院で慶應COVID-19研究コンソーシアム（K-CORC）を結成し345例の後方視的研究を行った結果、死亡リスクとして高齢や慢性腎臓病に加えて高尿酸血症を報告したことを紹介されました。次いでCOVID-19の治療にも触れられ、さらに現在注目を集めている後遺症に関して厚生労働省からの依頼を受け、本学呼吸器内科が中心となり研究を開始したこと報告されました。後半は、近年日常臨床でも遭遇する機会が増えてきている肺非結核性抗酸菌症に関して触れられ、2020年に13年ぶりに改訂された国際ガイドラインの紹介や本疾患の最近のトピックスに関して紹介されました。

呼吸器内科学は今回の講演にありましたように近年の病因・病態研究の進歩により治療法が格段の進歩を遂げています。しかし当然のことながら未解明なことも多く、挑戦すべき課題は山積みです。本学呼吸器内科もその壁を乗り越えるべく、若い力とともに今後も一丸となって精進したいと考えております。

最後に今回初めてのWEBセミナーでありましたが200名近くの方に参加頂くことができました。そして開催にあたり準備およびご支援いただきました関係者のすべての皆様に心から感謝申し上げます。

石井誠准教授（左）とモデレーターの福永教授（右）

理化学研究所、信濃町研究拠点設置へ

医学部長　天谷　雅行（64回）

慶應義塾大学と理化学研究所は、信濃町キャンパスに共同研究拠点を設置し、共創の推進に向けた連携・協力に関する覚書を締結しました。10月21日、信濃町キャンパス総合医科学研究棟ラウンジにて、理化学研究所（以下、理研）からは松本紘理事長、小安重夫理事、小寺秀俊理事らが、慶應からは長谷山彰塾長、青山藤詞郎常任理事、竹内勤常任理事らが出席し、覚書締結にともなう記念式典が開催されました。

慶應と理研は、2008年12月に基本協定を締結し、双方が築き上げてきた資産・能力・人材等を活用し合い、我が国の学術及び科学技術の振興に寄与することを目的として、共同研究等の研究協力、人材交流・人材育成などの面で多様な連携・協力を行ってきました。今日に至るまで、7つの個別協定が結ばれ、人事交流として、13名の理研の本務者が慶應を兼務し、23名の慶應の本務者が理研を兼務しています。また、直近7年間では、慶應から理研への研修生は173名おり、理研から慶應に28名が、慶應から理研に31名が転出入しています。

理研では第4期中長期計画を推進中であり、2018年度から7年間の本中期計画の中で「ヒトを理解する医科学研究」を掲げています。病院機能を持たない理研が医科学研究分野でヒトに迫るには、医学部・医学研究科・大学病院などとの連携が不可欠でした。さらに、今般の科学技術基本法の改正により、自然科学と人文学・社会科学は真に連携することも求められるようになりました。そのような状況の中で、理研が慶應義塾大学に共同研究拠点を設置することになりました。

信濃町キャンパスにおいては、がん、炎症、再生、代謝、免疫難病、稀少疾患など様々な疾患に対して最新の医療が提供されています。そして、多様性のある最先端の基礎研究が展開されています。そこに、自然科学における世界的な総合研究所である理研の研究拠点が設置され、慶應と理研が融合し、共創し、今までにない新しい潮流が生み出され、新しい人材育成の場が提供されることが期待されます。さらに、医学部のみならず、理工学部、薬学部、そして、人文系の学部との強固な連携に発展していくことが望まれます。

本年12月より総合医科学研究棟に研究室をユニット設置して共同研究活動が開始されますが、2022年度の本稼働を目指して、様々な準備が進められて行きます。具体的な研究内容に関しては、慶應と理研が共にWin-Winとなるべく、様々な意見を幅広く戴きながら、理研との連携協議会、ワーキンググループにおいて検討していきます。本拠点において、慶應が総合大学である強みを生かし、慶應と理研の間における連携・協力がより一層推進され、新しい科学が創出され、次世代を先導する多くの人材が育成、輩出されることを願ってやみません。

▲理化学研究所の松本紘理事長（写真左）と長谷山彰塾長（写真右）

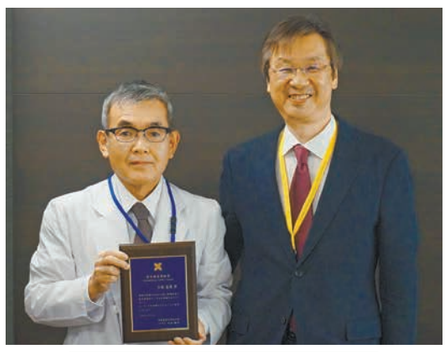
▼覚書締結後の記念撮影

医学教育貢献賞が創設

Best Teacher Awardの７名が受賞

2020年度より医学教育貢献賞（Outstanding teacher award）が創設された。医学教育貢献賞は、毎年、各学年の学生投票により選出されるBest Teacher Awardの第1位を3回以上受賞した教員に贈られるもので、今年度は以下の7名が受賞した。

医学教育貢献賞を受賞した教員は、翌年度以降、Best Teacher Awardの選出対象からは外れるが、今後の医学教育を担う若手教員に対する模範として活躍することが期待される。2020年10月26日に開催された医学部教授会において、医学教育貢献賞（Outstanding teacher award）の表彰式が行われ、受賞者を代表して、解剖学教室の今西宣晶准教授に表彰楯が授与された（写真）。


第２学年：解剖学教室
今西宣晶准教授（７回）

【2020年度医学教育貢献賞受賞者】
※（　）内は、Best Teacher Award第一位の受賞回数

第１学年：医学部（日吉）
井上浩義教授（９回）

第２学年：解剖学教室
仲嶋一範教授（５回）

第３学年：薬理学教室
安井正人教授（４回）

第４学年：小児科学教室
長谷川奉延教授（13回）

第５学年：内科学（血液）教室
森　毅彦准教授（３回）

第６学年：泌尿器科学教室
大家基嗣教授（５回）

才藤　栄一　君（59回）

National Academy of Medicineの国際会員に選出される

藤田医科大学学長の才藤栄一君（59回）が、米国National Academy of Medicine（NAM）の国際会員に2020年10月19日、NAM総会において選出された。NAMは、今年50周年を迎える独立非営利の学術機関であり、米国科学アカデミー、米国工学アカデミーとともに、米国および国際社会が直面している保健、医学、科学の分野における様々な課題に関して、卓越した専門家集団としての助言、提言を行う。NAM会員は、米国の医学、医療、公衆衛生分野における最高の栄誉といわれ、これまでノーベル賞受賞者など含む正会員2200名、国際会員175名が選出されている。毎年、正会員90名以下、国際会員10名以下が、候補者リストから会員投票で選出される。これまで日本人会員は、杉村隆（1994年）、黒川清（1996年）、岸本忠三（1997年）、山中伸弥（2015年）など11名（敬称略）であり、才藤栄一君が12番目である。慶應義塾大学出身者としては、天谷雅行君（64回、2016年選出）に続き2人目の選出となる。

才藤栄一君は、卒後すぐにリハビリテーション医学教室に入局し千野直一君（45回）門下として研修、1995年に藤田医科大学（当時、保健衛生大学）赴任。1998年～2019年秋まで21年間、リハビリテーション医学講座主任教授を務め、学内リハビリテーション関連組織を藤田リハビリテーション部門（通称）としてまとめあげた（2019年9月より大高洋平（76回）が同講座主任教授を引き継ぐ）。2019年4月から学長として星長清隆理事長（54回）とともに大学を牽引している。

藤田リハビリテーション部門は、才藤栄一君が赴任当時、総勢約60名であったが、慶應医学から園田茂（64回）、青柳陽一郎（72相当、2020年10月から日本医科大教授）、向野雅彦（82相当）、大高洋平ら（敬称略）が参加しその骨格形成と発展を促し、2020年には2つの正規講座、2つの寄付講座、療法士養成のリハビリテーション学科など12部門、総勢670名の日本最大級の大学リハビリテーション医学組織となった。その間、才藤栄一君は、日本、アジアのリハビリテーション医学そして世界の嚥下研究のリーダーとして活躍し、ロボット／支援機器開発や3D-CTを応用した嚥下メカニズム解明など、画期的な研究業績を発信してきた。米国や欧州などとの共同研究や相互交流を積極的にすすめ、世界のリハビリテーション医学の臨床・研究・普及を牽引してきたことが今回の選出につながった。

これまで国際リハビリテーション医学会の最高栄誉であるSidney Licht Lectureship Award受賞（2015年）など才藤栄一君のリハビリテーション医学分野での評価は揺るぎないものであったが、医学界全体としてその実績が認められたことは、リハビリテーション医学の後進の一人として、尊敬の念が尽きない。同時に大きな誇りである。今後も、医学・科学分野における国際的なリーダーとしての活躍を祈念すると共に、引き続き後進の育成に力添えを頂きたい。

（藤田医科大学医学部リハビリテーション医学Ⅰ講座　主任教授　大高洋平　76回）

三四会の皆さまへ　ご寄附へのお礼

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により家計が急激に悪化した医学部生に対するご支援について、8月中旬に武田純三医学部三四会会長より医学部にお申し出をいただきました。秋学期の学費納入に間に合うよう、早急に学生を募集し、家計支持者の経済状態や新型コロナウイルス感染症拡大の影響をもとに審査を行いました。10月初めに23名に対して総額300万円の奨学金をご支給いただき、学生からも「奨学金をいただいたことに恥じぬよう今後とも勉学に励んでいきたい」といった喜びの声が多く寄せられました。

また、慶應ドンネルプロジェクトへさらなる研究の発展のために、200万円のご寄付を頂きました。このたびは学生、並びに研究活動をご支援いただき、誠にありがとうございました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

医学部長　天谷雅行

【第５回健康医療ベンチャー大賞：決勝大会　観覧者募集開始！】

慶應義塾大学医学部主催のビジネスコンテスト、『健康医療ベンチャー大賞』の決勝大会が2020年12月20日（日）に開催されます。
第５回を迎えました今年度は過去最多の125チームの応募があり、その中で書類選考、１次・２次審査を通過した７チームが登壇いたします。

今年はシンポジストに株式会社三菱総合研究所理事長、プラチナ構想ネットワーク会長の小宮山　宏様、株式会社ビジョンケア代表取締役社長の髙橋　政代様、株式会社メドレー代表取締役医師の豊田　剛一郎様をお迎えし、お話しいただく予定です。

〈観覧応募について〉
■日時：2020年12月20日（日）13時00分～18時00分
■場所：Zoom
■応募フォーム：https://2020keio-antre.peatix.com/
※当日の支払いによる混雑を防止する目的で上記サイトにご登録の上事前決済をお願いいたします（手数料等は一切かかりません）
■応募締切：2020年12月19日（土）23時59分
※但し満員になり次第締切らせていただきます。
■参加費：学生　300円、社会人　2000円
■ホームページ：http://www.keio-antre.com/

鑑賞随想

新型コロナ禍によりテレワークにシフトする一般企業とは異なり、勤務医は毎日の病院出勤が当たり前である。私事ながら、14年間在職した慶應病院を離れ、昨年より埼玉医科大学国際医療センター（日高市山根）に勤務している。年間1000名を超える急性期患者を受け入れている脳卒中センターでは、毎朝の多職種カンファが欠かせない。朝8時開始のためには近くに転居するところだが、クルマ好きの私には自家用車通勤以外の選択はなかった。

往復112㎞、年間3万㎞の運転生活にもすっかり慣れた。関越道入り口まで、慢性渋滞の〝環八〟も夜明け前はガラガラである。非常事態宣言中の4、5月は毎日快適なドライブであったが、9月からは一変した。巣ごもり需要増加に伴う配送業者に加え、マイカー通勤に切り替えた乗用車であろうか、日に日に渋滞がひどくなっている。東名用賀から関越大泉JCTまでを約12分で直結させる大深度地下トンネル竣工が待ち遠しい。環八最長1263mの井荻トンネルを抜けると間もなく練馬入り口である。関越道は長岡まで246㎞の本州横断道だが、利用するのは鶴ヶ島インターまでの約30㎞区間である。所沢、川越の灯を抜け、入間川を渡ると関東平野の終わりを告げる山並みが近づいてくる。その〝山根〟に国際医療センターがある。〝日高〟市は〝日和田（ひわだ）山〟と〝高麗（こま）川〟から二文字から命名されたと聞く。高速を降りると残り10㎞。古くからの酒蔵、醤油醸造所を抜け、高麗川を渡る。少し先にあるのが高麗王若光を主祭神として祀る高麗神社である。この辺りは、716年高麗人を武蔵国に移住させて建都した高麗郡（『続日本紀』）であった。

山裾を上ると突然姿を現す医療センター。玄関ホールには白いグランドピアノ、ヒポクラテスとナイチンゲールの肖像画が見える。夜明け前の空にはオリオン座。右肩のベテルギウスの光が再び弱くなっているそうだ。虫の音が増していくと脳卒中の季節である。一刻も早いコロナ終息を祈る。

（埼玉医科大学国際医療センター　髙橋慎一　66回）